

別紙1

| | | | |
|------|---|---|---|
| 報告番号 | ※ | 第 | 号 |
|------|---|---|---|

主 論 文 の 要 旨

論文題目 小中学生における自閉スペクトラム症特性と心理社会的適応の関連についての検討—休み時間の遊び及び運動能力に注目して—

氏 名 中島 卓裕

論 文 内 容 の 要 旨

本論文の目的は、一般小中学生における自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder ; 以下 ASD とする) 特性と心理社会的不適応の関連について、関連が強いと考えられる運動能力及び学校での休み時間の過ごし方に焦点を当てることを通して、検討することである。

ASD を含む発達障害には多数の遺伝子 (Abrahams, & Geschwind, 2008) や発達初期の生物学的ストレス (Newschaffer et al., 2007) が複合的に関与するため、その症状の程度は一般の定型発達児者から医学的診断を有する発達障害児者まで、明確な境界のない連続的な分布 (スペクトラム) を成すことが明らかになっている。そのため、「ASD であるか否か」ではなく、「ASD の要因がどの程度その人の精神状態及び生活の質に影響を及ぼしているか」という視点が必要なのである (本田, 2017)。ASD 特性の高い児童はその中核症状によってコミュニケーションや対人関係に関する課題を抱えやすく、そのような特性から、日常生活で対人関係における難しさを感じる場面に多く直面することで、不安や抑うつ症状、友人関係の悪化といった心理社会的不適応に発展する可能性が指摘されてきた (e.g. White, Oswald, Ollendick, & Schahill, 2009 ; Bauminger, & Kasari, 2000)。

ASD 特性と心理社会的不適応を媒介する要因として、これまで ASD の中核症状である社会的機能の側面に焦点が当てられてきた (Howlin et al., 2004 ; Klin et al., 2007)。その一方で、近年の縦断研究では、外遊びをする児童生徒ほど、抑うつ症状・友人関係の問題が低く、向社会的行動の頻度が高いことが報告されている (伊藤ほか, 2021)。運動能力の高さが外遊びへの参加を規定すると考えれば、運動能力は抑うつや友人関係などの心理社会的適応に影響を及ぼすことが予測される。ASD 特性と心理社会的不適応を媒介する要因として、従来検討されてきた社会的困難さだけでなく、運動面の困難さや休み時間の過ごし方が一定の役割を果たしていることが推測される。

第2章では、抑うつや攻撃性などの情緒・行動的問題が顕在化しやすい児童・青年期(小学4年生から中学3年生)において、自閉スペクトラム症特性と二次障害的な心理社会的適応(向社会的行動, 抑うつ, 不安および攻撃性)を媒介する変数としての休み時間の

役割を検討することであった。小学4年生から中学3年生までの通常学級に所属する5,366組の一般小中学生及び保護者から得た大規模データを用いて検討を行った。パス解析の結果、ASD特性が高いほど休み時間に非対人的な遊びをして過ごしていることが多いことが明らかとなった。また、ASD特性と心理社会的適応の関連を媒介変数の休み時間がどの程度説明するかを推定した結果、休み時間の遊びを介した間接効果は、全間接効果(休み時間+友人関係)の2~6割、総合効果(直接効果+間接効果)の2~4割程度に及ぶことが示された。休み時間の遊びは、友人関係の下位要素の一つと見なすことができるが、向社会的行動では間接効果の65%、抑うつでは46%、攻撃性では26%を説明したことから、友人関係における休み時間の重要性の高さが示唆された。

第3章では、一般小中学生における運動能力を媒介とした自閉スペクトラム特性と心理社会的不適応(友人関係問題、抑うつ)の関連プロセスを検証した。第2章と同様に小学4年生から中学3年生の5,084組の一般小中学生及び保護者から得られた大規模データを用いて検討を行った。パス解析の結果、ASD特性が高いほど運動能力の苦手さがみられることが明らかとなった。また、ASD特性と抑うつとの関連においては26%が、ASD特性と友人関係問題の関連については小学生で25%、中学生で16%が運動能力を媒介した間接効果であったことが示された。これらの関連においていずれの性別及び学校段階においても有意な効果の差は見られなかったことから、性別及び学校段階によらず心理社会的不適応に対して運動能力が一定の寄与を果たしていることが示唆された。

第4章では、本章は、児童期における遊びと他者との関わりの発達について概観した上で、放課後等デイサービスを利用する児童生徒を対象とした、遊びに焦点を当てた介入プログラムの実践報告を行った。小学1年生から中学2年生までの11名がプログラムに参加し、自由遊びの時間に見られた遊びのレベルから2つのグループに分かれてプログラムを実施した。プログラムは隔週全6回で実施され、個人での簡単な遊びからルールのある遊び、チームで行うルールのある遊びを経て会話遊びへとつながるように構成されていた。プログラムに参加した児童生徒は、プログラム実施後の放課後等デイサービスでの自由遊び時間に見られる遊びのレベルが上がった児童が多く見られ、参加前には自分の興味のあるものを他者と共有しようとしなかったり、一方的に共有しようとしたりする行動が多く見られた児童生徒が、少しずつ相手の反応を見ながら共有しようとする行動が見られるようになっていた。これらの変化から、遊びを通じた支援の意義について考察した。

第5章の総合考察では、これまでの内容を総括し、一般小中学生におけるASD特性と心理社会的不適応の関連について整理するとともに、それらの関連を媒介する要因について論じた。ASD特性は従来考えられていたような非線形的な特性ではなく、全ての児童生徒に関連するスペクトラムを成す特性であること、そしてその

特性は中核症状である社会的機能だけではなく、運動能力や休み時間の遊びを媒介として心理社会的不適応に大きく関連することが量的に示された。また、ASD 特性の高い児童生徒に対して行われる支援に関して本論文が果たす意義について考察した。最後に、今後の展望について考察した。

本研究の特色は、従来診断概念として捉えられてきた ASD を、特性として扱い検討することで、一部の臨床群が対象ではなく、多くの児童生徒における傾向について明らかにすることを試みている点である。さらに、これまであまり検討されてこなかった休み時間の過ごし方や運動能力を媒介要因としてモデルに含み、代表性の高い一般小中学生のサンプルを対象として ASD 特性と心理社会的不適応の連続的な関連を定量化しようとした点において、大きな意義があると考えている。